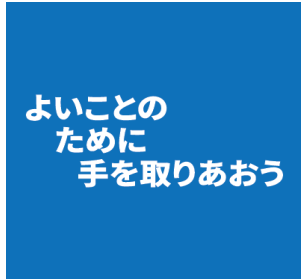


2025～2026年度
国際ロータリー会長メッセージ



国際ロータリー会長
フランチェスコ・アレツツォ

2025～2026年度
地区基本方針

「未来へつなぐ」

RI第2650地区ガバナー
小崎 学

葉
蛇紋石



作: 杉村 仁 会長

会 長	杉村 仁	副 会 長	佃 尚彦	副 会 長	安井 清悟	会長エレクト	井上 直治	直前会長	佐川 寛一
幹 事	加藤 又拡	会 計	木村 和弘	会場監督	丸山 佳映	理 事	井上 直治	理 事	岡崎 義幸
理 事	東山 光秀	理 事	安井 清悟	理 事	松中 隆	会報委員長	岡崎 義幸		

第18回(2565回)例会プログラム令和7年12月11日(木)

1. 開会宣言 点鐘
2. ソング 「ロータリーってなんだろう」
3. 来訪者紹介
4. 出席報告
5. 会長の時間
6. ニコニコ報告
7. 委員会報告・幹事報告
8. 新入会員卓話:「自己紹介」田中 耕造 会員
10. 閉会宣言・点鐘

第17回(2564回)例会報告 2025. 12. 4
ソング

「君が代」「奉仕の理想」

出席報告

	会員数	出席計算 免除会員数	出席会員数	欠席者数	出席率
通 算 2564 回	21	1/1	15/20	5	76.2%
通算2562回修正	20	1/1	15/19	4	80.0%

会長の時間 (杉村会長)

皆さん、こんばんは。早くに日が暮れます。
加藤幹事殿が本日、腰痛のためご欠席ですので
木村会計殿に会務をお願いいたしております。
早くも12月に入りました。お忙しい事と存じます。
どうかお体にお気をつけお過ごしください。
本日ご入会の井久保様、お誕生日の松中隆様、
植野洋志様、小松玲子様、中井肇一様、おめでと
うございます。
奈良県のオフィシャルの展示会「県展」が12月
11日～21日まで奈良県立美術館で開かれます。
入場無料で県庁駐車場は平日1時間無料です。
よろしければご覧ください。



ニコニコ報告

杉村仁会長

いよいよ12月に突入です。
皆さんお元気でお過ごしください。

下村由加里会員、小松玲子会員、木村和弘会員、
岡崎義幸会員、川上顕慶会員
井久保さん新入会おめでとうございます。
ニコニコ!!

東山光秀会員、松中隆会員

今年も、もう師走。1年早いですね。
インフルエンザと百日咳が流行しています。
皆さんお身体ご自愛ください。



会員の誕生祝



■12月生まれ■

松中 隆会員	12月3日
植野 洋志P会長様	12月9日
小松 玲子会員	12月14日
中井 肇一会員	12月26日

皆様 おめでとうございます

会員夫人の誕生祝

■12月生まれ■

中井 肇一会員夫人	世津様	12月5日生
杉浦 剛会員夫人	亜寿佳様	12月9日生
安井清悟P会長夫人	和美様	12月29日生

皆様 おめでとうございます

新入会式



井久保 裕也 会員、ご入会おめでとうございます！



Rotary
Club of Nara-West

卓話

「会長ノミニー卓話」

東山 光秀 会長ノミニー



このたび会長会からノミニーにご推挙いただき、本日より理事会にて承認されました東山です。微力ですが奈良西ロータリークラブのために頑張りたいと存じます。どうぞ宜しくお願いいたします。今日は何を話そうかと考えたのですが、来年のえとの馬のことをお話させていただきたいと思います。

Rotary
Club of Nara-West

現代、観光地で馬車を引く馬(PTA)



江戸時代、荷物を運ぶ馬(東海道五十三次之内 平塚 馬入川舟渡しの図)

亥	戌	酉	申	未	午	巳	辰	卯	寅	丑	子
イノシシ	イヌ	トリ	サル	ヒツジ	ウマ	ヘビ	竜	ウサギ	トラ	ウシ	ネズミ
阿弥陀如来	不動明王	大日如来	勢至菩薩	普賢菩薩	文殊菩薩	虚空蔵菩薩	千手観音	慈悲智慧	悟りの智慧	衆生救済	衆生救済
導く	極楽浄土へと	煩悩を消す、長寿を得る	慈恵の象徴	万物の智慧と	迷いを取り除く	正しい道へ教える導く	正しい道へ教える導く	悟りの智慧	慈悲智慧	衆生救済	衆生救済

十二支にはそれぞれ守本尊が定められているが、その大元はお釈迦さまである。菩提寺の本尊は自分の守本尊であり、我が家の守本尊でもある。

生まれ年の干支で決まる一代守本尊とは
人は生まれながらにして、仏に守られて生きている。日本人はそのような信仰を持って暮らしてきた。生まれ年には、子はネズミ、丑はウシ……と動物が当てられた。この考えは日本にも伝えられ、十二支信仰は日本人の生活に浸透していったのである。江戸時代になると十二支ごとに仏教の守護本尊信仰が民間信仰として庶民の間に広まった。
午・馬年の一代守本尊は勢至菩薩。

-2-



古墳時代に製作された馬形の埴輪(東京国立博物館)

お正月の行事の代表格といえど、競馬場の駆け抜けるサラブレッドぐらいしかイメージできないかもしれない。しかし、もともと馬と人間は深い友情で結ばれていた。性格は従順、顔や目も優しい。人の心を見抜く能力を持つ生き物である。しかも、人を助け、よく働き、田畑を耕した。そんな馬を日本人はこよなく愛した。

令和八年は午・馬年。十二支の七番目である。今では馬といっても、競馬場を駆け抜けるサラブレッドぐらいしかイメージできないかもしれない。しかし、もともと馬と人間は深い友情で結ばれていた。性格は従順、顔や目も優しい。人の心を見抜く能力を持つ生き物である。しかも、人を助け、よく働き、田畑を耕した。そんな馬を日本人はこよなく愛した。

し、乳によって人を養ってきたのも馬である。少年時代からモンゴルの大草原に憧れを持っていた司馬遼太郎はそんな馬を「母のようであつた」と考えていた。そのような馬を日本人は愛して接してきた。また馬は、単に利用価値の大きい生き物というだけでなく、信仰の対象でもあった。「馬は天を駆ける聖なる動物なり」という言葉がある。今年は午年。人間の友、馬に願いをかけよう。

-1-

謹賀新年

うま年に願う

仏教と馬

日本仏教の始祖、聖徳太子は馬上の聖者だった

馬は古来より日本人に親しまれてきた生き物。乗用・農耕用・軍用・今では競馬からスポーツへと、その付き合いは長い。仏教との関わりも深く馬頭観音は六観音の一つとされている。馬は十二支の七番目。日本人の信仰の対象でもあった。とりわけ聖徳太子と馬との関係は濃密である。じつは、馬は日本仏教の発展に多大な寄与をしていたのである。

聖徳太子は常に馬と共に行動した
聖徳太子は日本仏教の育ての親。「倭国の教主」「観音の化身」などと呼ばれている。日本仏教の始祖であるから、聖徳太子ゆかりの名利もおおい。その代表的なものといえば法隆寺。聖徳太子が建立したと伝えられている。聖徳太子霊跡は一番から二十八番目までの二十八ヶ寺。第一番は四天王寺、第二十八番は斑鳩寺。二十八ヶ

寺は近畿二府一県に渡る。日本最古級の古寺。巡礼して太子の心に触れたいものである。
聖徳太子と愛馬甲斐黒駒
そこで聖徳太子だが、実は馬との関わりが深かった。太子は物静かな人物で馬をこよなく愛したという。「風土記逸文」の伊豆風土記の記述によると、「太子は幾内からは遠い伊豆(静岡県)と甲斐(山梨県)に八つの牧(牧場)を所持してい

-3-

聖徳太子三王子像(東京国立博物館所蔵)



た。」とある。太子は牧場で馬を育てていたのである。当時、馬は財産であり、政治力の象徴でもあった。その馬を太子は支配していたのである。太子の行動は馬と切り離せなかったようである。馬は太子の交通手段でもあった。太子はまさに馬上の人であった。

また甲斐(山梨県)から献上された黒駒(黒い馬)の能力を瞬時に見抜き、愛馬とした。その馬こそ甲斐黒駒である。実際、



愛馬黒駒に騎乗し富士山を目指して空を駆け上がる聖徳太子(スミソニアン博物館)

聖徳太子が愛した甲斐(山梨県)の黒駒とは
実際、聖徳太子と馬との話は日本各地にある。太子ゆかりの地に斑鳩と飛鳥を結ぶ道がある。この道を「太子道」という。距離にして、約十六キロ。騎乗して二時間。太子はここを馬で移動し続けたとされている。

愛馬黒駒像は飛鳥の橋寺に立つ。また、甲斐国には聖徳太子と馬にまつわる話が数多くある。黒駒を得た太子の行動範囲は広がったとされている。太子の愛馬甲斐黒駒は高い能力を持ち富士山に登る姿が描かれた絵もある。乗っているのは聖徳太子という伝承もある。

-4-



愛馬カンタカに乗って城を出るお釈迦さま
釋氏源流應化事蹟(米國議会図書館)

さまを慕い続け食事も喉を通
らなかつたという。
愛馬カンタカは亡くなつて
天界に生まれ変わったと伝え
られている。
お釈迦さまと弟子は厚い信
頼関係で結ばれていたが、お
釈迦さまと愛馬との関係も同
様であった。それほど愛馬と
は深い絆で結ばれていた。



涅槃図(大英博物館所蔵)

お釈迦さまの入滅の様子が描かれた絵を涅槃図という。
涅槃図には弟子・信徒はもとより多くの動物たちの姿も
描かれている。涅槃図には「あらゆる生命に仏性」あり
という教えが込められている。

仏教と動物

涅槃図に学ぶ

馬と仏教との関わりといえ
ば、お釈迦さまにも馬との関
わりは当然あった。釈迦族の
王子だった頃、どうしたら生
老病死の苦しみから抜け出せ
るのか深く考えていた。そこ
で四つの門から場外に出てみ
た。
東の門の外では老いて苦し
む老人に出会い、老いていく
苦しみを知る。南門から出る
と病人に出会い、病の苦しみを

知る。西門の外では、横たわ
る死者を見て死の苦しみを知
る。
城外で見たのは厳しい生老
病死の現実だった。
お釈迦さまは悩み苦しん
だ。王子の頃からすでにこの
世の無常を深く考えていた。
どうしたら、この苦しみから
抜け出ることができるのか。
出家修行者との出会い
若きお釈迦さまは悟りを求
め最後に北門から出るとそこ
には出家修行者があり、そ

の堂々たる姿に心を動かさ
れる。これを仏教では四門
出遊という。
お釈迦さまの出家は愛
馬カンタカとともに
お釈迦さまはシッダールタ
と名乗っていた。若き王子は
出家を決意。悟りを求めて求
道の旅に出る。その時王子は
二九歳。
お釈迦さまは馬に乗って城
を出た。この時乗っていた馬
が「カンタカ」である。子供
の頃からの愛馬であった。
カンタカはお釈迦さまと後
に別れることになるが、お釈
迦さまと別れカピラ城に帰っ
てからも、カンタカはお釈迦

仏教と馬 お釈迦さまと愛馬カンタカ

「四門出遊」生老病死の苦しみ

お釈迦さまの出家は愛
馬カンタカとともに

お釈迦さまはシッダールタ
と名乗っていた。若き王子は
出家を決意。悟りを求めて求
道の旅に出る。その時王子は
二九歳。
お釈迦さまは馬に乗って城
を出た。この時乗っていた馬
が「カンタカ」である。子供
の頃からの愛馬であった。
カンタカはお釈迦さまと後
に別れることになるが、お釈
迦さまと別れカピラ城に帰っ
てからも、カンタカはお釈迦

馬頭観音の怒りは慈悲の心



馬頭観音 東京中野・成願寺
馬頭観音は慈悲の心
王に近い性格
を持つ。馬頭

なぜ怒りの表情
をしているのか
観音様は姿を変え
て、あらゆる人を
救ってくれる仏(菩
薩)である。

そのため観音像は極めて多
い。その姿はしなやか、眼も
優しい。
しかし馬頭観音だけは怒り
の表情をしている。形も奇
怪。その怒りの表情は仏法に
敵対する者を蹴散らし人々の
暗を照らし苦
悩を断つため
だとされてい
る。そのため
ほかの観音さ
まと比べて明
王に近い性格
を持つ。馬頭

馬は馬頭観音の化身なり

ばとうかんのん

明王、大力持明王とも呼ば
れているのはそのためである。

馬頭観音は 路傍の仏さま

しかし、時代とともに馬頭
観音の信仰も変化。鎌倉時代
以降は道中安全を守る存在と
して信仰されるようになって
いった。江戸中期には村の路傍・
分かれ道、峠の難所、交通の
要所などに建てられるように
なった。馬頭観音への信仰は
人々を苦しみから救う存在で
あり馬の無病息災も祈った。
馬頭観音は徒歩で旅する江
戸人の心の支えであり、旅人
の仏さまでもあった。

十二支信仰は日本人の 生活に深く根ざす

江戸の昔から十二支は現在
とは考えられないほど人々の
生活に関わっていた。また
十二支は動物が当てられてい
たこともあり、日本文化、日
本人の心にも深く浸透してい
た。十二支は時刻や方角を表
す意味でも使われていた。時
刻は寺院の鐘の音で知らされ
ていた。ちなみに午の刻は昼
の十二時(正午)を指す。「午
の刻」より前を午前、後が午

十二支の動物と日本人

後である。鐘の音は九つ。
方角では午の刻は真南、子
は真北、卯が真東、酉が真西
である。このように江戸の昔
は人々の生活は十二支と深く
結びついていた。

馬年生まれの一代守本 尊は勢至菩薩

仏教と馬との関わりは深く
彫像や絵画などにも数多く見
られる。
動物に騎乗している仏(菩
薩)は数多い。勝軍地藏など
は馬に地藏の格好をした武士



勢至菩薩 奈良国立博物館所蔵

が乗っている。
午年の守本尊の勢至菩薩と
は「大勢至菩薩」の略。智慧
の光で迷い苦しむ人を救っ
てくれる。大地を揺るがす力
の持ち主とされ願い事を叶え
てくれる仏さまとしても知ら
れている。
勢至菩薩は、午(馬)年生
まれの一代守本尊で心願成
就、家内安全、厄除け、招福
などの願いを、勢至、すなわ
ち偉大な力で叶えてくれる仏
さまである。

今から2500年ほど昔のお釈迦さまの時代に、コーサラ国という大国があり波斯匿王という大王がおりました。大王は凶暴で、自分の意に従わない国を次々と侵略して、自らの欲望を欲しいままに君臨していました。

一方この国に、仏教に深く帰依する長者、スダッタ長者がおられ、お釈迦さまのために祇園精舎を建立されました。この精舎には鐘がふたつあって、朝は6時に鐘をつき、他のひとつは時刻の6時に鐘を鳴らすということ、朝な夕な鐘の音を聞く独居生活の老人たちは、鐘の音を聞き諸行無常を感じる生活をしておられました。『平家物語』の冒頭に「祇園精舎の鐘の聲、諸行無常の響きあり云々…」と書かれたことは有名です。

凶暴で独裁者の波斯匿王は、晩年お釈迦さまに説得され、仏教に帰依され、信者となりました。波斯匿王には、末利(マリー)夫人という心優しく美しい王妃がおられました。

ある満月の夜、高台に登られ月を見ながら大王は王妃に向かって、「妃よ、お前はこの世で一番大切なものは何だと思う」と尋ねられました。王妃は大王の問いにしばらく戸惑いながら「王さま。私はこの世で一番大切なものは、大王のあなたではなく、私自身だと思います。王さまはこの世で一番大切なものは、何だとお思いですか?」と逆に問い返されました。大王は妃を見ながら「そうだなあ、お前の言う通り、私も自分が誰よりも一番愛おしく大切に。マリー妃ではない。」とおっしゃいました。

お二人はこのような考え方で良いのだろうか疑問に思い、お釈迦さまのところを訪ねられました。

二人は「お釈迦さまにお尋ねしますが、我々は二人とも、この世で最も大切に愛おしいものは自分自身だと考えていますが、そのような自分勝手なことの良いのか否か、教えていただきたいのです。」と言いました。

するとお釈迦さまは、王と妃の二人を前にして、「お二人の考え方はそれで良い」と言われました。そして、「大王よ、能く聞くがよい。この世界に生きる全ての者は、誰もが自分自身が一番大切に大事だと思っ生きています。生命ある全ての者は、誰もが自分が愛おしいのです。誰もが自分が大切だと思っ生きていますから、生命を奪ったり、傷つけたりしないことが大切です。」と教えられました。

地球上に生きている全ての者は、自分を中心に生きているのです。誰もが、自分を愛おしいと思っているのだということを忘れないことです。

この世で最も愚かなことが、戦争で他国を侵略したり、傷つけたりすること。そのことを忘れない生き方をしたいものです。

「驕も舌に及ばず」という故事があります。昔は馬が最も速く、四頭立ての馬車は、今の新幹線のような乗り物でした。この「午」に「小」を付けると「忤」という字になります。

丙午歳は、自然が最も盛んな陽気になるのですが、この陽気の中に一つの陰気が萌え、陽気と陰気が相交わるとあります。言い換えると「忤」の状態を意味し、『そむく』『逆らう』となります。

「舌」は言葉を発することで、調子よく約束をしたり、口が滑ったりして、つい失言をしようものなら「驕」(四頭立ての速い馬)で追いかけても取り戻せない、とんでもないことに巻き込まれかねないということです。

祇園精舎・・・古代インドのコーサラ国にあった仏教寺院。釈迦の大口支援者だったスダッタによって寄贈された。釈迦が説法を行った場所

例会の様子



Rotary
Club of Nara-West



第19回（通算2566回）例会予告
例会日 令和7年12月17日（水）

「家族親睦クリスマス移動例会」

ホテル日航奈良にて